

比庵佳境の会



邪を拂ひ正を助けてわが世をば
守りたまはん南無不動大明王 比庵九十三

不動明王
昭和50年

比庵と保田興重郎と

相模女子大学名誉教授

柿木原くみ

令和二年三月発行の「相模国文」第四七号に、「清水比庵周辺の人々と自用印」と題する小論を投稿した。清水固様より比庵自用印についての調査を依頼されていたのでその調査報告と、周辺の人々の中で保田興重郎と大本琢壽との交友関係とを合わせたのである。原稿は五〇枚余りの分量なので、ここでは発表論文に削除・修正・加筆等を含め全体を簡潔に述べることにした。

保田興重郎の略歴

保田は明治四三年（一九一〇）年四月一日に奈良県磯城郡桜井町（現桜井市）に生まれ、昭和五六（一九八一）年一〇月六日に没した。畷傍中学から大阪高校、東京帝国大学卒業。大和の桜井という風土が保田の文芸思想形成の根源を成す。昭和五年、在学中から同人雑誌『炫火』を創刊し、湯原冬美の筆名で評論や短歌を発表。七年『コギト』一〇年『日本浪漫派』創刊。反近代主義を柱に文芸評論家として活発な文筆活動を展開、「時代閉塞」状況に置かれた戦中の青年に熱烈に迎えられる。戦後しばらくはジャーナリズムに黙殺されるも雑誌『祖国』を創刊、己の思想を貫き通し活躍の場を広げ、三九年の『現代畸人伝』等の刊行によって再び注目を集めた。

保田興十郎の山荘身余堂について

『清水比庵短歌集』（平成二〇年、笠岡市立竹喬美術館友の会）の二二三番を紹介したい。

保田先生邸

しげり立つ細松林夕霧は空より染めて
みなくれなみに

この保田先生邸は、京都鳴瀧にある身余堂

のことである。保田は昭和三四年春に太秦の文徳天皇御陵への参道上の台地に山荘を建て居住した。『保田興重郎のくらしー京都・身余堂の四季』（平成一九年、新学社）の「藍毘尼青瓷茶會」と題する保田の一文の中に、次のようにある。

まづ玄関には棟方志功畫伯の「身余堂眞木柱建板畫」、爐の間には、清水比庵翁の「涼意」の額、比庵翁は、歌、書畫の三絶に於て、現在日本一と思つてゐる崇拜者が多い。小生は二十五年前翁を日本一とよんだ一番古い崇拜者である。（筆者注「涼意」落款は比庵と印一顆のみ作品である）

比庵も訪れた身余堂、筆者も平成三〇年四月一日（保田の生誕一一八年の日）、前出谷崎昭男先生の著『保田興重郎』の刊行を祝う会の折に、身余堂をご案内いただき、前日は桜井の保田家周辺を散策したことだった。清水比庵との出会い

昭和一〇年六月九・一〇日、比庵は中禅寺湖畔において「慈悲心鳥を聴く会」開催。この会に關して、『保田興重郎 吾方民族ノ永遠ヲ信ズル故ニ』（平成二九年谷崎昭男・ミネルヴァ書房）より引用する。



日光歌会
後列右
3人自より
清水比庵
保田興重郎
岡本一平
萩原勝太郎
中河與一
長谷川巳之吉
前列右より
四賀光子
岡本かの子
若山貴志子
中河幹子

日光町長時代
中禅寺湖畔の慈悲心鳥を聴く会

日光町長で、その頃は比舟と号してゐた清水秀の招待で中禅寺湖畔の慈悲心鳥を聴きにいく一行に保田も加はった。幹事役の中河与一から保田は誘はれたと覚しく、後に号を比庵と改めて、独自の風韻で歌と書画に作品の愛好者を次第に広くあつめるやうになつていつた清水に引合される機縁を得たことは、保田の知見を広くした上に、同行者には萩原朔太郎岡本かの子、それに第一書房の長谷川巳之吉らがあつたことが、このときの記憶を保田にいつまでも止めさせた。日光から帰つて、前川佐美雄が前年に創刊した『日本歌人』の九月号に寄せた『珈琲店酔月』から清水比舟氏の長歌に及ぶ一は前月の八月に『国語・国文』に発表の『更級日記』と並べるとき、流麗な行文において及ばないが、それでも朔太郎の『氷島』への共感を語りつつ、初めて読んだ清水比舟の長歌に、それと一脈を通じるもののあることを述べて、どんな対象でも、つねにそれに合せた切り口を見出す保田の才は、ここにも鮮かである。

さまざまな交流

保田の評した比庵の長歌は「賽銭」「四家文字嬢」「芸者駒次」「富士」などである。保田の評の一部を紹介する。

(前略) 勿論僕のごで論じるものは「朝明」の中の長歌をさしている。それは世俗の歌である。しかしその歌をつらぬく詩的精神はつねにきびしい高踏であるのだ。清水氏の長歌の立派さを知るもの、僕が初めてであるとは思つていないけど、歌人にしてまだ未知の人びとにこそさら清水氏のことを広告することを評家としての僕の義務を感じた。(中略)

さらに、保田は比庵の長歌について、歌壇のマンネリズムに対する気味よき皮肉さえ感じた。

と述べ、その後十四年一月号の「四季」に「長歌」と題する一文を寄せ、比庵主宰「二荒」に掲載の比庵の随筆について次のように述べる。

これも独自の一品ものである。その長歌と親類のような飄逸の風格は、あまり売文作品の中には見られぬ大きくて小さい文章であると思つて、それも私は愛読している一つである。(中略) 比庵さんの長歌にもそういう万葉の中の人知れぬ長歌の一寸した云い廻しによく似たものがあつて、それは似ているとかまねていくとかいうのではなく、何か教えてくれるものがあつた。その比庵さんの長歌は今日、空穂さんのそれとでも一緒にいうより他ない位にめずらしいものだが、随筆のめずらしさも私には捨て難いことであつた。

保田の比庵への評価は、人としての信頼の上にあることが、文を通してしみじみつくづくせまってくる。前後するが、慈悲心鳥を聴く会の後、保田は「しかしこの旅で、私はそのころ日光の町長をしてゐた清水比庵先生を初めて知つたのである。今の文壇や藝術界で、私が最も尊敬してゐる一人はこの翁である」と記している。保田によつて歌人としての比庵の評価は確固たるものとなつたといえよう。

一方、比庵の昭和三七年四月の随筆「今日の書画境」の文中から、保田に関わる部分を引用する。

今年の正月試筆は松の画の大作に引か かり毎日日々かいてはかき直し、(中略) そのかき直しの一つを京都の保田先生に送つた。保田先生は小生の歌をほめて下さると、書に関心の深い人であるから、歌や漢詩を書いたものは時々送つてゐたが、画を送つたことがなかつたのでどういふことになるかと思つてゐたところ、やがて手紙が来て、その作品の

生命力に驚嘆した、どうも驚いたと書いてあつた。保田先生の言葉によると、小生の作品は歌が基本となつてゐる、書も画も歌に拠つて出来てゐるといふことである。

『現代畸人伝』の装幀と題字

昭和三九年、保田は『現代畸人伝』(新潮社)を刊行した。『現代畸人伝』について谷崎昭男先生は『保田與重郎』の中で、保田はつねに文学といふ思想を具体的に描いてきたのであり、批評によつてこそ能くし得た「現代畸人伝」といふ思想は、それまでの戦後における保田の最大の達成であつたと云つていい、と記している。そしてまた、『現代畸人伝』によつて、保田與重郎は文壇への復帰をとげた、と書いている。

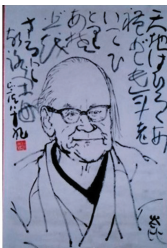
その『現代畸人伝』の装幀と題字を依頼されたのが比庵であつた。一卷は、函の著者名、表題、出版者名を比庵の筆で、また見返しに、「雨ふりぬ天気になりぬそれだけのわが明け暮れのひとり言かな 比庵八十二」と自詠歌を書いている。

比庵は、保田先生の『現代畸人伝』は言葉が水の流れのやうに流れてその上へ話が乗つて出てくる。誠に不思議な言葉の芸術であるが、この本がよい本であるおかげでその装幀も好評で、と記している。

一方で谷崎昭男先生は、造本の出来は、保田にとつて、思ふに満足すべきもので、発売になると重版する発行だつたのは、その文もさることながら、清水比庵の装幀があつていなかつたであらうかといふのは、私の臆測である、としながら、隔意のない両者の風雅を通じた交渉は、終生に亘つて渝らなかつた。



展示場にて清水比庵と



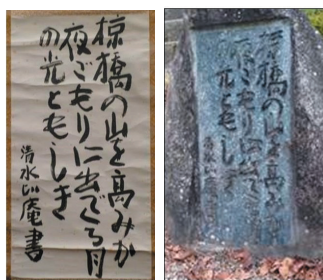
比庵似顔絵に比庵が画賛

なされ、以てわが国今日の、最も高い次元の精神の仕業を、後代にのこされることは、年久しく一貫して、先生を敬慕し來つた小生の、欣喜であり、さらに安堵でもある。

た、と結んでいる。

名家似顔絵展にて

昭和四六年三月、銀座壹番館画廊で清水昆画伯による一人名の名家の似顔絵に、当人直筆の賛入り作品の展覧会が開催された。一人名は比庵・保田の他、川端康成・林武・武原は九等である。



聖林寺歌碑と原書
保田の山を高みか夜ごもりに出てくる月の光ともしき
清水比庵書
万葉集 間人宿禰 大浦の歌

桜井市の万葉歌碑建立

昭和四六・四七年にかけて、桜井市は紀・万葉歌碑三十九基を建立した。保田はその企画から関与し、揮毫者は保田はもとより、比庵、川端康成、棟方志功、林武他で保田との縁による人選である。そして、二人の尊敬と信頼の重みを感じる。

『比庵いろは帖』に禮讃文

昭和四七年『比庵いろは帖』(求龍堂)刊行。その巻頭に保田は「比庵先生禮讃文」を記している。末尾の部分掲げたい。

今度先生が伊呂波四十七字の仮名帖をなされることは、非常の気魄である。近世の先人のあとを見ても、特別にその意義が感じられるのである。比庵先生が九十賀を記念して、この事業を

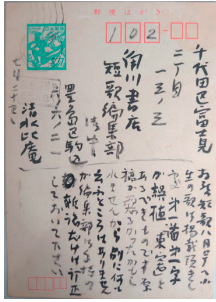
と、保田は書いています。比庵に対してその心を文字にして流れるように、書いたのであろうと思うのである。そして、昭和四八年の桜井市大神社へ萬葉歌揮毫の大額奉納へと繋がっていくのであった。

保田は「保田與重郎の書展」(平成一〇年、東京青山・永井画廊)を開催し、和様の尤なるものと評されている。保田は「手習ひ記」の文中、「書の学びは、先人の心を学ぶことである。その最も直接の法である。このやうな学び、即ち『手習ひ』によつて、今の私は、千年昔の人と同じ道をゆき、同じことを行へるのである。」と記している。そして、「書といふものは一番よくその人の品性を示し、また時代の風格風儀も示す」とも書いている。「書は人そのものだ」というこの意は、「手習ひ」という言葉同様、字面でわかるものではないのであつて、ここでは表現することばが、出てこない。ただ書に携わる一人として、心にとめておかなければならない、と思う。

谷崎先生から頂いた二つの資料

比庵と保田の交友を記す文中度々登場する谷崎昭男先生は保田門下の文芸評論家で、筆者の母校相模女子大学では学長・理事長を歴任された。温雅で強い信念を秘めておられた。谷崎先生は令和元年一〇月二六日逝去された。

新年の床の間には、保田先生奥様より頂いた比庵の作品を必ず掛けている、とおっしゃっておられたことを思い出す。筆者は比庵に関わる多くのご教示をいただいたが、比庵が角



川書店短歌編集部へ宛てた葉書一枚と原稿も頂戴した。共に『清水比庵短歌集』に未収録歌各一首を確認するので紹介しておきたい。二通共駒込の住居からである。

角川書店短歌編集部宛葉書 (七月二十四日)

拝啓 短歌八月号へ小生の歌御掲載頂きし處第一首第一字が誤植「東窓」とあるべきものです原稿が悪るかつたかもしれませんが、編集部御手持の雑誌だけは訂正しておいて下さいと記している。因みにこの「東窓」の歌は『清水比庵短歌集』一六五五番に収録されている。

朝仙酔山

東窓みなみの窓もひろびろと海を見はらす広きよき室

葉書裏面

未収録歌一首

屋根ばかり群がる上を蝶一つ漂ひゆけり白炎天に 比庵

いまだ何年の八月号か未確認である。しかし、比庵のこの対応は見事であると思う。

角川書店「短歌」編集部宛原稿 (昭和四十七年十一月二十九日消印・速達)

いま一点、原稿の方は「いろは帖」という題で四百字詰原稿用紙四枚に毛筆で書かれている。内容は「いろは帖」を中心に話の広がりが生き生きとしているので、ご一読いただきたいと思う。

いろは帖

京都から奈良へ車が走る。京都も奈良も皆紅葉である。別に紅葉の名

所を見て廻つてゐるわけではないが、概念的に京都も奈良もみな紅葉といへる。これは畫にはかけないところの歌の表現である。

京都奈良みな紅葉なり
京都より奈良へ車の走

りゆくなり

といふ歌が車の中で出来た。佳作とは思へないが、この一二句は保存しておきたいので歌にしておいた。

奈良ホテルへ腰を下して間もなく東大寺宗務長、清水公照さんを迎へた。この和尚さんは小生の「比庵いろは帖」を奈良博物館長から貰つて、ほんもの(小生の肉筆)が見たいと云ふことで、小生の友人N君のところへ行き、N君所持の小生の作品をいろいろ見た中に

奈良詠みの會津八一の歌ありて
大きみほとけ天足らしたり
といふ歌を書いたのがあるのを見て、之は東大寺と関係があるからほしいと云はれたとN君から手紙が来たので、早速之を書いて敬呈した。之は先年奈良へ遊んだとき、東大寺門前に石柱のやうな八一翁の歌碑があり、

おほらかにもろてのゆびをひらかせて
おほきほとけはあまたらしたり
といふ歌が彫つてあるのを見て、八一翁の歌は仮字ばかりで書いてあるので、それで勿体らしく見えるなどという人があり、之はかなり鋭い観察と思ふけれど、この歌などはやはり傑作で、総じて翁の歌は奈良を詠んだものが殊に勝れてゐると思ふので、翁の歌の下旬を借りて翁の奈良詠みを称へたものである。それでお茶をのんでから和尚さんに従ひその居住の東大寺宝嚴院を訪れた。この和尚さんに付ては小生は以前から興味をもつてゐたもので、書も畫も誠に手ごたへのあるものをかかれる。それで宝嚴院へ何つて和尚が今年八月にかかれ大切に手許に置いてゐた畫帖寒山風狂子を無理に貰つて来た。どうもこの寒山拾得が和尚の最も得意の畫題のやうである。

此日は奈良へ一泊、翌日は奈良に近い桜井市に於ける萬葉歌碑除幕式に参列した。之は桜井市に散在する、萬葉の歌にゆかりの三十

餘の場所に、そのゆかりの歌を各知名の文化人に書いて貰つてその歌碑を建てたもので、小生もその筆者の片端の一人として選ばれたものであるが、市内にある日本最古の神社と称されて有名な三輪明神社殿に於て、その歌碑を一々写真にとり、それを並べて除幕式



額田王下近江国時作歌 天地六年(六六七年)の近江大津宮遷都に際し古京飛鳥を去るに当たつての作
味酒(ウマザケ) 三輪の山 青丹よし
奈良の山の 山の間(マ)に い賑るまで
道の隈(クマ) い積もるまでに つばらにも
見放(サ) けむ山を 情なく 雲の隠さふべしや
反歌
三輪山を しかも隠すか雲だにも 情あらなも
かくさふべしや
九十一叟 清水比庵書

比庵おじいちゃんの思い出

ワーデン充子

(清水比庵の米孫娘 米国在住)



筆者近影 米国の自宅で

を行はれた。豫て小生はこの三輪明神社務所の大廣間に掲げる額を書くやう依頼せられていたので、宮司に従ってその現場を見せて貰ひ、どれくらいの大きさの額にすべきかを相談した。宮司は小生が老人なのであまり大きくなくてもといふ考へがあつたらしいけれど現場を見ると、大きなものの方が落付くやうなので、傍におられた保田与重郎先生は畫箋全紙二枚続きではどうであらうかと云われ、小生も大字の方が愉快なのでその位ならと思つた。

さて直らいのテーブルに就いたとき、會ま佐藤佐太郎先生と並んだので一寸挨拶をする、奥さんを顧みて、お前が好きだと云つてゐた「比庵いろは帖」の筆者比庵先生だよと紹介せられた。またいろは帖であるがこのいろは帖は、小生が始終云つてゐるところの、歌人に書を勧め、書家に歌を勧めるその見本として書いたやうなもので、昔は歌と書とは一所の教養として勉強したもので、今でも歌人の中には丹尺や条幅の展覧会を開く人もあり、それも歌が下手であれば仕方がないが、上手な人ほどその人柄に床しさを加へ格が上がる。それでも習字が嫌ひといふことであれば原稿を原稿用紙の舛目の中へ毛筆でかくことだけでも勧めたい。どうも會津八一翁の仮字など原稿用紙の仮字ではないかと思はれるのである。以上

孫を抱き (清水比庵)

千葉市川市時代

下野短歌 昭和16年7月月号
比庵 59歳
孫充子 2歳

孫を抱き歩いて居れば
かわいらしき見るとひとり
言ひ過ぐる婦人もあり
口許をはつかにゆるめ
眺めゆく老人もあり
大方は子うまごなど
もちて居るにてあらむ
はたやわが抱くこの孫
かくばかりかわいらしき
孫にてもあるぞ

私は清水比庵の最後の孫娘として千葉県市川市に昭和十四年(一九三九年)十月五日(一九三九年)に生まれました。因みに充子という名前と字は比庵がつけ、充分みち足りるという意味があるようです。当事比庵は栃木県日光町(現在の日光市)町長を単身赴任で九年務めた後退任し、私が生まれた直後市川市の家族の許に戻ってきました。私と祖父との出会いはこの時から始まります。祖父母、父、長兄、次兄、長姉、次姉、そして私と九人の大家族で

一 三歳頃のおじいちゃんの思い出―祖母の死など

祖父 比庵の私の思い出は三歳頃から始まります。どういう訳か私は目が覚めると、いつもハンモックの中にいて、一番に声をかけてくれたのがおじいちゃんでした。比庵は私にとつて何時になつても優しいおじいちゃんなので、ここからはおじいちゃんと呼びせていただきます。後で分かった事ですが、母やおばあちゃんは、育ち盛りの子供たちの世話や食事、父や、おじいちゃんの世話などで忙しいので、「わしの所に寝かせておけばよい」と、アトリエのように使っていた六畳の部屋にハンモックを吊るして私を見てくれたのでした。作品制作の合間には私はおじいちゃんの膝に座つて毎日毎日絵本を読んでもらうのが日課でした。その絵本もお気に入りであつて、必ずそれを読んでもいつも要求していました。その絵本の挿絵がお祖父ちゃんも好きで、寒い国(シベリヤのチュクチャ地方)の子供たちのお話だったようです。この話は兄や姉たちも鮮明に覚えていてるようで、多分皆一緒に読んでらつていたので、と思います。

こんな楽しい思い出のなかに、突然、経験のない、不安と悲しみを含んだ画面のようない出が今もはっきりと目に浮かびます。私が三歳になつたばかりの昭和十七年十月三十日に比庵最愛の妻(私の祖母)鶴代が五六歳で心筋梗塞で急死したのです。やつと単身赴任も終わり家族の許に戻り、自由に芸術の世界に生きる楽しみに浸り始めていくときでした。その時のことを私はほとんど覚えていませんが、ワンシーンだけは忘れたくとも忘れられないのです。お葬式会場だと思ひます、私は父尚(ひさし)、比庵の娘明子の婿養子)に抱かれ、父とおじいちゃん、細い廊下か階段の近くで話をしています。おじいちゃんを初めて同じ目線で見、悲しみにくれきつた、今まで見たこともない、

憔悴した彼が可哀そうで、何か本当に怖いことが起つたのだと、父にしがみついて泣いたのを覚えています。おじいちゃんも父も黒い服装だったので喪服姿だったのだと思ひます。この衝撃的な思い出は当時のお祖父ちゃんへの悲しみが今でも私に沸々と伝わってくるほど強烈なものなのです。

昭和十九年は戦争もたけなわで市川市の防空壕の思い出が残っています。我家の縁側のすぐ外の庭に防空壕が作られてありました。空襲警報がなると皆防空頭巾をかぶり一目散に防空壕に入るので、順番がありました。先ず、おじいちゃんが一番安全とされる奥に座る、次に私が入りお祖父ちゃんの迎い側に座ります。それから小さい順に入つて両側に次々とすわり最後に母が入口に最も近い位置にすわるのです。婿養子の父尚(ひさし)はその時は四二歳でしたが応召されて内地勤務でしたが我が家にはいなかったと思ひます。怖さと静かにするように言われていたせいか、お話し上手なおじいちゃんもあまり話さなかつたように覚えていてます。警報解除までじつと折る気持ちで皆我慢するのです。何回も何回もこうして防空壕に入ったものです。

二 笠岡への疎開旅行の出来事

戦争はますますひどくなり、東京が焼夷弾爆撃の対象になり、ついにおじいちゃんの妹が嫁いでいる岡山県笠岡町(現在は笠岡市)におじいちゃんと孫の我々姉妹三人が先ず疎開することになりました。昭和十九年(一九四四年)十二月のことです。

笠岡へ疎開! 五歳二カ月の私、七歳十カ月のすぐ上の姉汎子(ひろこ)、十歳四カ月の長姉好子(よしこ)を連れておじいちゃん、手助けの為に一時戻つてきてくれた父と共に岡山県笠岡町までの五人の長旅を始めます。母は兄二人と市川市に残りました。今考えると我々孫三人は初めての汽車の旅で楽しかつたと思ひますが、おじいちゃんにと

つては幼い孫達を連れて汽車に乗る長旅は、父が同伴とはいえ心細かった事と思います。

そして現実には大変な失敗が起つてしまっています。私たちは何とか無事に特急で岡山駅に着き、そこから山陽線(各駅)に乗り換えて笠岡駅に行くのです。岡山駅に着くと姉の汎子が腹痛を訴え父が駅長に話すと、まだ乗るべき汽車まで時間があるし、ちょっと駅長室で休んでいらつしやいと親切に連れて行ってくれました。お蔭で姉も横になつた休むことが出来、そこまではよかつたのですが、ゆっくりし過ぎて気が付くと我々が乗るべき汽車がホームに入ってきているとわかり、さあ大変と父は急ぎ立て、荷物は全部自分が持つて先に行つて座席を確保するから、皆で急いで来なさいと言つて先に歩いて行つてしまいました。おろおろする私たちをおじいちゃんはやつとこさ連れてホームに來たけれど汽車は一つではなく、どれに父が乗つているのかわからず、出発合図があつたのでとにかく、一番近くの汽車の車両に乗つて中を歩いて父を探そうと、四人はやつとの思いで飛び乗ると同時に汽車は出発しました。中に入ると車内は物凄く混んでいて空いている座席などありません。とにかくお父様を探そうと人混みをぬつて車両から車両を探し回り、ついに最後の車両にもいないとわかつておじいちゃんが近くの人に聞くと、なんとこの汽車は笠岡と反対の姫路に向かつている急行であることが分かつたのです。当事岡山から姫路まではかなり遠く、車内には兵士達がごろごろと横になつたり床に座り込んでいました。父と離れてしまったことと心細さや、おじいちゃんの困つた様子、それに座ることもできず私と汎子姉は泣き出してしまいました。どなたかが気の毒に、思つてくださったのでしよう、一つ席を譲つてくださったようで、私と汎子姉が座らせてもらい、いただいた飽をしゃぶり姫路に着くまで寝てしまつたのを覚えています。長姉好子は氣丈にお

祖父ちゃんを支えてくれたのだと思います。姫路からの戻りの汽車は、急行で何とか問題なく岡山まで戻り、また乗り換えて、笠岡に各駅車でやつとの思いで着きました。ホームに降りてやつと着いたという安心感で孫三人が階段を上がり向こう側のホームにある改札口に向かうべく階段を降り始めたとき、岡山行きの電車がそのホームに入つてきてそれに乗ろうとしている父を見つけ、三人が大声で「お父様!!!」と叫んで父と合流、めでたしとなつたわけです。父はあちこち駅に連絡したが誰も我々を探すことが出来ず、一度岡山駅に戻り、もう一度笠岡駅 行ききの電車(多分我々も乗つていた)でまた笠岡に着いたがやはり見当らないので再度岡山に向かうつもりだつたようです。おじいちゃんはこの時のことをよつぽど閉口したらしく、日記に長歌を書いていきます。

三 疎開先笠岡での生活

三ヶ月ほど私たち孫三人はおじいちゃんとお本林平叔父さん、章叔母さんの家でお世話になりました。母がいなかつたので、おじいちゃんも大変だつたと思います。それに、



笠岡へ疎開直後のおじいちゃんと私

叔母さんには子供がいなかつたので、子供たちの世話なごしたことなかつたのですから。おじいちゃん私の世話をよくしてくれましたが、たつたひとつ私

小さい頃からお風呂が大好きでしたが、岡本の家のお風呂は苦手で、怖くて入るのを好みませんでした。それには訳がありました。初めておじいちゃんとお本の家のお風呂に入つた時のことです。おじいちゃんが体を洗つてくれ、濯ぎ水をかけてくれて、さあ先に湯船につかりなさいと言われ入つたのです。深いお風呂でしたがあつたかと思つた瞬間風呂桶の底板がふわつと浮き、何が何だかわからないうちに体が倒れて顔がゆぶねにつかつてしまいました。五右衛門風呂だつたのです。泣き叫ぶ私をおじいちゃん「よしよし、おじいちゃんも一緒に入つてあげるから」と言つて入つてくれたので、重さで底板も沈み、一段落という訳でした。それ以後はおじいちゃんと一緒に湯船につかつてくれました。でも五右衛門風呂のあの体験は今でも忘れることが出来ません。

その頃東京はどんどんと焼け野原になり、市川市も危なくなつてきたのでいよいよ父が母と兄二人もこちらに連れて来ることになりました。東京を発つ日に東京で大空襲があつて大変だつたが、何とか來れたのだと後に兄から聞きました。母が來たのでおじいちゃんもちよつと自分の時間も出來ましたが、家族全員岡本の家の世話になるわけにもいかず、岡山市の大空襲もあつて笠岡も危ないとの見解が広まり、念のため笠岡の奥地の田舎の吉田村(現在は笠岡市に編入)に再疎開することになるのですが、この時私はおじいちゃんの手をつなぎ、一里の道を歩き、とても褒められたのが何よりうれしく、今でもあの満足感が頭の中に残つていのです。大好きなおじいちゃんがつても喜んで褒めてくれたのですから。その後終戦になり私たちは吉田村から笠岡に戻り、おじいちゃんだけ笠岡町本町の岡本家に残り、母と孫五人は笠岡町の住吉という海岸に近いところの家を借り、そちらに移りました。

四 東京駒込での生活

終戦から二年余り経つた昭和二十二年暮れに東京都豊島区駒込の都営住宅が抽選であたり、家族全員が東京に引き上げてきました。あたり一面焼け野原で、その中にボツンと二三軒小さな家が建つていたので覚えていいます。おじいちゃんだけは、落ち着くまで弟浩叔父さん(清水三溪)のところ(世田谷区祖師谷)で過ごした後に駒込に戻つて來ました。おじいちゃんには一部屋があつていつも絵をかいていたり、墨をすつて筆が真っ黒になるまで丸のようなものを書いていました。私と姉の汎子は小学校二年生と四年生になつていて近くに適當な小学校がなく、母の知人の世話で文京区の昭和小学校に入ることができました。孫達五人は各自学生生活がありました。毎日おじいちゃん中心の八人家族はとて楽しく、一緒に食事をし、とてものにぎやかでした。私はどこのおじいちゃんも、こういう風なおじいちゃんのだと思つていたので、友達「清水さんのおじいちゃんつてうちののおじいちゃんど違つていつも楽しいね」と言われ、びつくりしました。我が家のお正月のお雑煮は関西風でお餅を柔らかくしてつゆに入れるのですが、お正月の朝みんなが食べる数を計算するのが私の仕事でした。元旦の朝起きるとすぐに、「おじいちゃん、お餅いくつ?」「うん、そうだな。じゃあ四つ。」「お父さま、いくつ?」「まあ六つかな?」「お兄ちゃん達は?」「八個。」「一〇個」と今考えるととつともない数でした。育ちざかりだつたしお餅も小さい丸餅だつたように思っています。もう一つお雑煮で思い出すのは、おじいちゃんが「武士のお雑煮には必ず寒ブリが入つている。これがとても美味しいんだ。」と何時も言つていた事です。脂がつつてしまつてある寒ブリは我が家のお雑煮にかかせないものだつたのです。お蔭で寒ブリなしのお雑煮は今でも私には考えられませんが、五人の孫達も大きくなるにつれ、我が家も狭く

なり、改築することになり、二階の一部屋がおじいちゃんのアトリエ座敷となりました。おじいちゃんには、毎日毎日郵便物がたくさん配達されていましたし、よく来客があったのを覚えています。そして毎日おじいちゃんの手紙やはがきを少なくとも五、六通は書いて、ダイニングエリアの決まった場所に置いてあり、それを我々家族の外に出る人が、気が付いた人が近くの郵便ポストに入れるという暗黙の了解がありました。色々な面で本当に忙しい人でしたね。それでいて結構私達とも時間を割いてくれました。小学校にいた私は、いつも元氣いっぱい学校から帰ると大きな声で「たっだい ま！」と言うので、二階まで聞こえるらしく、「おお、帰ったか？」と、母のほか二階にいるおじいちゃんまで返事をしていました。大人になっても私も家を出ると、おじいちゃんに「充子がいなくて静かすぎるのお」といついていたそうです。私は小さい時から読書が好きだったので、疎開から東京に戻った頃は経済的にも母が本を買ってくれたことでも、学校から帰り、簡単なおやつをいただいていると、おじいちゃんが二階から降りてきて、「帰ったか。よしよし」と一緒に冬は、炬燵に入っている昔の武士の話などしてくれるのですが、そのお話がとても上手で面白くて、私はこの時間がとても楽しかったのを思い出します。残念ながら、全く筋骨は覚えていませんが、一つだけよく覚えているものがあります。これは家族中知っている有名なお話です。比庵を知る人は皆さん知っているかもしれませんが・・・これは比庵が彼の母親から子供の時に聞いたお話のようです・・・泥棒の話・・・一人の老人がある夜もう寝ようと思いつつ寝ていて、おじいちゃんとおじいちゃんのお音だと気づいた老人は考えて

泥棒や、まだ寝はせぬぞ、
起きてまつむし

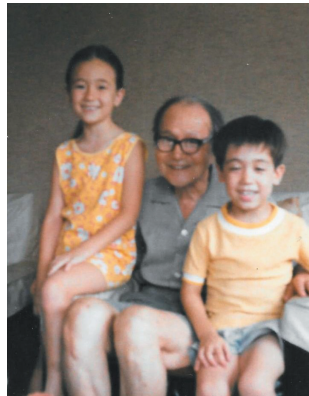
と大声で一句詠んだ。すると

まつむしと知らずに壁をきりぎりすと泥棒が反応してきた。なんだ。お前も俳人だったのか。まあ上れと老人は泥棒を部屋に招き入れ、一緒に茶を飲み交わした。おじいちゃんはこの話で俳句というものに興味があればいいです。そして短歌に進んだのだと思います。この話は私の長兄が学校で発表して褒められたそうです。

おじいちゃんはこの頃から夏は必ず毎年三、四ヶ月笠岡や生れ故郷の高梁町に帰っていました。グリーン車もない頃なのではじめの数年はおじいちゃんを無事に列車に乗せて席を確保するのは、我々孫たちの仕事です。母と皆で東京駅で手を振って「おじいちゃん、行ってらっしゃい！気を付けて！」と見送り、子供ながら何か寂しさを感じたものです。おじいちゃんは故郷で多くの比庵芸術を愛する人々に囲まれ、充実した四ヶ月ほどの生活も終わり、また東京の家族との生活が始まります。我が家はまた八人家族に戻り、賑やかになります。おじいちゃんには毎晩電話がかかってくる。三、四人の女性からで、当時我が家では親子電話を使っていたので、一階でとって二階のおじいちゃんに知らせるというやりかたでした。相手方は必ずお名前を言っておくのですが、私は勝手にちやめつけをだして、ガールフレンド一、二、三、四などと置き換えてしまい、「おじいちゃん！ガールフレンドNo.」からお電話です！「おお、よしよし」という感じでした。もちろんその前にNo.は誰々さん、No.は...と祖父に知らせておいたのですが、その電話は楽しみだったようです。私はよく、祖父に、「おじいちゃんのまわりにはいつも女性ファンがいるのね」と言っていました。無理もありません、祖父の温かい人柄はとても人気がありましたから。後に私が大人になってから、この毎日お電話をしてくださった方々とお会いするたびに、私は心のなかで赤面いた

しました。

私達が成長してからも、自分のことはなるべく自分でする方針のおじいちゃんでしたが、雨戸を閉めたり、夜のお布団敷きくらは、すぐ上の姉の汎子と私の仕事となり、お部屋に行ってみるとテレビで当人人気の歌の番組などよく見えていました。朝はおじいちゃんのお音が起きるのが早いので、お布団あげと、雨戸を開けるのは、自分でしていました。これは運動の一つだったようです。毎朝テレビでNHKの英語の勉強もしていました。もう一つ、祖父の運動は、二階の廊下を行ったり来たりと毎日歩くことでした。更に歩きながら手を叩いていました。どうして手を



ひ孫と共に

叩くのと聞くと、これは頭に良いらしいとのことでした。比庵流健康法だったのでしよう。

時が過ぎて、私の長兄、次兄、長姉三人はずでに結婚して家を出ており、すぐ上の姉と私が家に残っていたのですが、昭和三七（一九六二年）に、姉より一足先に私も結婚し、家を出て、米軍新聞記者だった夫の仕事の関係で、沖縄に行くことになりました。三年ほど沖縄に住んだのですが、その間に私達は娘と息子を授かり、二児の父母となりました。当事沖縄はまだ日本に返還されていませんでしたが、アメリカ本土のように大陸をわたるような距離ではなかったため、私達は夫と共に家族で三度里帰りが出来ました。娘を連れて初めて里帰りをした時、久しぶりに会っ

たおじいちゃん、目を細めて笑顔で心から喜んでくれました。おじいちゃんの岡山行きが重なっていたので、例によって皆で東京駅までお見送りに行き、新幹線が発車する前にひ孫である娘を隣に座らせて写真を撮ったのです。嬉しそうにお隣のひいおじいちゃんを見上げる娘、満面笑顔でひ孫娘を見下すおじいちゃんの写真を見るたびに、私は今でもあの時の大切な一瞬の思い出が目にちらつきま

す。二度目の里帰りの時は私は息子を身ごもっていました。娘は元氣にひいおじいちゃんのお部屋にお邪魔したりしていました。何かいたずらをするのではないかと私ははらはらしましたが、おじいちゃんも適当にお相手をしてくれたみたいでした。駒込では、私も母の手伝いで多少はお料理をしましたが、おじいちゃんのお食事はやはり、母が作っていました。ある日夫がジャガイモを丸ままオーブンで焼く、ペイクドポテトが食べたいということで、作りました。その時、もしかしてと余分につくり、「おじいちゃん、これ半分は切って、バターをのせて食べると、美味しいのだけ食べてみない？」と言うと、めずらしく「うん、食べてみよう！」と乗り気です。驚いたことに、「うん、確かに旨いな」と美味しそうに全部食べてくれたのです。という訳で、やっとなつだけおじいちゃんに食べてもらえぬものを発見して、私は大喜びしました。これは次に帰った時も食べたいと言われ、私の定番となりました。

五 宮中歌会始めの召人

今でも忘れない思い出に皇居で一月に毎年開かれる歌会始の儀に、おじいちゃんが昭和四一年に召人に選ばれたことです。当時は沖縄滞りが終わり、いよいよ夫がアメリカ本土に帰国が決まり、家族四人で日本を離れることが決まったので、その前に実家で二週間ほど過ごすべく、駒込に帰って来ていたのです。昭和四〇年（一九六五年）の十二月でした。ある朝早くから電話が鳴り



続き、何が起ったのかと起ると、お祖父ちゃんはずで起きてテレビが大きいかかっており、新年の歌会始めの召人に清水比庵氏が選出されたニュースが流れていました。母はと言うとお祝い電話の取次ぎか、おじいちゃんも電話の応対で大忙し。その間をぬって、やとちよつと落ち着いた時、私はおじいちゃんのお部屋に行き、何が起っているのか聞くことが出来ました。おじいちゃんはずと困ったような、でもとても嬉しそうな顔をしていたのが、今でもはっきり目に焼き付いています。召人とはどう言う人なのかということをお話してくれた時、なぜこんなに大騒ぎになったのが、初めてわかりました。「おじいちゃん、天皇陛下に捧げる歌は何時作るの？」と聞いたのを覚えています。「うん、今これに相応するきれいな歌を考えているんだよ。」と自信ある返事でした。そのうち、母から「素晴らしい上品なきれいな歌よ」と聞き、早速教えてもらいました。この歌を知った時、芸術の世界にいない私でさえすごいなあ、さすがおじいちゃんだなあとつくづく思ったものです。

ほのぼのと、むらさき匂う あさばらけうぐいすの声 山よりきこゆ

型にはまらない比庵三芸を私に目覚めさせてくれた時でした。その後はさらに来客が増え続け母も忙しそうでした。私も幼子二人

抱えているのであまり手伝いも出来ずにいます。発表後二、三日たった頃だと思えます。ちよつと母がその場にいなかった時の出来事だったと思いますが、「ごめんください」と何方かお玄関にいらつしやう、はい！と息子を抱いて出ようとしたとき、あつという間に娘が走り出てしまいました。後を追って急いで出てみると、ご立派な静かな男性が、「入江侍従です」とおっしゃるので。ご丁寧に土産などお持ち下さり、私はびつくりして口に出す言葉も見つかりませんでした。こんな大切なお客様がいらつしやうたのには母はいないし、私は元気づける娘を鎮めるのが精いっぱい。「活発なお嬢ちゃんですわね」とお客様は笑って下さり何とか終わつたのですが、後で母とおじいちゃんに、「もうどうしようかと思つた」と話したら、「それが我が家なんだよ、心配するな」と笑ってくれましたが、私には如何に召人の任務が大きなものかよくわかり、おじいちゃんを本当に誇りに思いました。数日後、夫に子供たちをみてもらつていたので、母と話す時間があり、何気なく「おじいちゃん歌会始めの服装は決まってるの？」と聞くと、「それがモーニングは誰かに借りるつもりというのよ。」と云うので、「それでは今日はおじいちゃん服装点検をします。」と母を連れて、二階に行き、おじいちゃんに「服装点検です」と伝えました。全て不合格。そこで私はおじいちゃんに「一生一度の晴れ舞台ですから、モーニングは新調し、靴は孫一同からのお祝いで新しく買います。」と宣言してしまひ、お祖父ちゃんも困った様子でしたが、孫の私には娘と違い逆らえず、「そうか。よしよし」と一言も反対出来ません。この時の事をおじいちゃんは何かに書いていました。後で母から、家を出る晴れ姿のおじいちゃんが「この姿を充子に見せてやりたかつたのう」と呟いていたと聞きました。実は晴れの日の一週間前に私達は日本を離れなければならな

かつたのです。後で母から出発前の正装の写真を送ってもらつた時は和やかな笑顔のおじいちゃんハンサム姿に涙が出るほど嬉しかったです。歌会始めの儀の日は私達親子はすでにアメリカ本土での生活が始まつていました。当時は現代のようにテレビ中継も見れず、母が皇居での中継のテレビを写真に何とか撮ってくれて、やつと少し様子がわかりました。本当に忘れたい思い出のひとつです。

六 アメリカ移住後の生活
異国に来て言葉も違い、私はこちらでの生活を慣れるのに無我夢中に最初の二、三年を過ごし、東海岸から夫の仕事のため西海岸、カリフォルニア州のオレンジ郡に移りました。こちらでの生活にも少しずつ慣れて、様子を母達に知らせるために、子供たちの写真なども送つたりはしましたが、日本の家族はとも恋しかつたですね。日本を出た後一、二年でまた里帰りをしようと思つていたのですが、やはり実際には二人の子供を連れての里帰りは簡単ではなく数年が過ぎてしまいました。夫を残し子供たちと私の三人でやつと里帰りし皆に再会出来た時はまるで夢のようでした。カリフォルニアはオレンジの産地で当時日本ではネーブルオレンジがとて高かつたので、検閲された箱入りのネーブルオレンジをおじいちゃんも喜んでくれました。その頃のテレビ番組で、おじいちゃんも「パパは何でも知つていゝ」というアメリカでも人気のあつた番組をよく見ていて、「そこに出てくる女の子と男の子がお前の子供たちを見ていゝようでも面白いんだよ。」と笑つていましたね。さらさらつと筆で似顔絵を描いたりもしていました。兎に角おじいちゃん孫五人のみならず、ひ孫一〇人の優しい一番の人気者だつたことは確かです。ある日おじいちゃんに、「これからは紅色の絵の具をもつと多く使おうと思つていたので、試しにアメリカの絵の具もちよつと試してみたから送つてくれないかな？特別な

ものでなくてよい。」と言われたことがあり、帰来後に手探りで探し送つたのを覚えていますが、それをつかつたかどうかははっきりと記憶にないので、日本の良い物を使い始めたのだと思います。

七 おじいちゃんからの嬉しそうなお手紙
日々子育てに追われているなか、私はおじいちゃんのお誕生日に何か送りたいと考えていましたが、ふとひざ掛けなら時間を見ながら作れるかもしれないとひざ掛けを編むことにしました。昭和四十九年（一九七四年）十二月のことでした。二月八日の満九二歳のお誕生日までには一月に送れば間に合うと思つたからです。私からの小さなプレゼントをおじいちゃんも喜んでくれたらしく、暫くしてお札と、ちよつとしたニュースを私に知らせるために、手紙を書いて送つてくれました。ひざ掛けは有難く暖かく毎日掛けていゝというほかに、「お母さん以外は誰にもまだ話してないのだが、充子にだけは知らせておきたい。日本文化庁で比庵作品を外国で紹介するという計画があり、現在検討中であるので、この六月本人から願書を提出するようになっていゝ。其の上で最終決定するらしいとの事らしい。作品紹介は多分来年になるようだ。他の希望者も多く必死に運動してゐるらしいが、自分は何一つ運動らしき事はしてないのだが、文化庁の人が比庵の作品に注目し、今外国へ紹介するのはこの作品だと言われているらしい。六月頃充子は来日するようなので、その頃にはもつとはつきりするであろう。」という大変びっくりでまた嬉しいものでした。母からの同封の手紙では、もし実現すれば、出来るだけ父母、祖父三人で行くつもりだと乗り気でした。この夢のようなニュースは残念ながら祖父の死もあつて実現にはいたりませんでした。この手紙がおじいちゃん最後の記念になりました。今は額装して大事に保管してあります。

八 おじいちゃんとの別れ

昭和五〇年（一九七五年）五月にふとした風邪がはじまりで、満九二歳のおじいちゃんは体調を崩してしまつたのです。私が電話をした時、「もうずっと寝ているんだよ。早く治りたいのだが。」と言っていました。「充分養生して、一日も早く元気になつてね。必ず帰国するから。」と電話を切りましたが大きな不安が心をよぎつたのを覚えていません。更に母からももしかすると今回帰国しないと最後になるかもしれないから、出来るだけ夏休み帰国しなさいと後に連絡があり、私達は家族四人で七月に帰国することになり、やつとまたおじいちゃんと再会できました。おじいちゃんはすでに入院しておりましたが、とても喜んでくれ、私もやつと会えて飛び上がるほど嬉しかったのですが、おじいちゃんの弱った姿に胸が痛みました。一カ月の滞在も終わり、帰米する日の朝早く私は子供たちを夫と母に頼んで、最後の病院訪問をするため家を早く出ました。おじいちゃんはいつもの訪問時間でなく、こんなに早く来たのでちょっとびっくりしていましたが、「ベッドから一人で降りて歩くことが出来なくなつたんだが、家に帰つたほうが良いから帰るとお母さんに伝えてくれ。お前はアメリカに帰るのか、元気でやりなさい。」と自分が病気になるのに、私を案じて弱い笑顔で別れを告げてくれたのです。「はい。また来るからお祖父ちゃんもがんばつてね。」と明るく別れたのですが、部屋を出た途端堪えに堪えていた涙が噴出してきて暫く病院を出ることができませんでした。そしてこれが私の愛するおじいちゃんとの最後の別れとなりました。母が私に「おじいちゃんが『わしが亡く後寂しくなつたら、お父さんを思い出しなさい、その時わしはその場に來ているから』と言つた」と語つたことがあります。私はこれをいつも心に思い浮かべ先に逝つた人を想う時そこにその人がいるのを感じるので。芸術を愛

し、芸術に生き、家族・友人を大切にしている人間味あふれた大好きなおじいちゃんの孫娘としてこの世に生を得た私は、世界一幸せ者だと思つづく思う今日この頃です。そして日本で比庵展があると可能な限り帰国して兄弟と共におじいちゃんを偲び作品を楽しんでいます。更にアメリカで比庵展が出来たらと夢見る日々です。以上

比庵先生と南天坊窯

豊池 勇（笠岡市の美術商）

私が高校生の頃の思い出です。笠岡で清水比庵作品展が開催される前夜に二人の方が父に面談する為に相次いで我が家を訪れていました。お一人は本誌前号（十三号）で紹介された矢部犀洲さん、そしてもうお一人は南天坊窯の金田盛太郎さんでした。

矢部犀洲さんはスラッと長身の中年紳士、金田盛太郎さんは物静かで小柄な老人でした。お二人は毎年恒例となつていた清水比庵先生の笠岡信用組合特設会場における新作展にそれぞれの作品を展示即売されていきました。比庵作品と同様に初日開場と共に売約済みとなる人気作品でした。

比庵芸術は歌・書・画の三芸と謳われますが、それに木工芸の矢部犀洲作品（窓日彫）とやきものの南天坊窯の金田盛太郎作品の二つの芸術分野を加えて芸術作品の世界を拡大し、多方面に発表していました。

そこで南天坊窯の茶碗作品（茶碗）を紹介いたします。なお清水比庵の茶碗等については、いずれ本紙にまとめて記載させていただきます。以上



箱書き



南山寿



松

今後の比庵展のお知らせなど

比庵佳境の会

会長 清水 固（清水比庵の孫）
〒247-0022 横浜市区庄戸 3-5-18
TEL&FAX 045-893-8932
携帯 090-6340-0181
メール katashi-shimizu@hat.hi-ho.ne.jp
URL: <http://www.hat.hi-ho.ne.jp/katashi-shimizu/>
幹事：比留間 哲生
〒247-0022 横浜市区庄戸 3-25-7
TEL 090-4608-0488

会費納入のお願い
令和二年度会費を下記に納入されますようお願いいたします。
一口、1,000円（複数口歓迎）
三井住友銀行鶴見支店
普通 7061558
名義 クボタノブユキ
なお現金で会長「清水固」宅（下記）に郵送されても結構です。